

「ちょっといいが
そこにある」
羽曳野



応神天皇陵古墳外濠外堤
(誉田)



竹内街道
(飛鳥)



旧浅野家住宅
(軽里)



白鳥陵古墳
(軽里)



明教寺
(島泉)

悠久の歴史とともに時が流れるまち

『古事記』・『日本書紀』に登場する古代の英雄ヤマトタケルノミコトが
没後、白鳥となり空を舞う姿が「羽を曳くが如く」だったと伝わる「白鳥伝説」

それが地名になり今も語り継がれるまち

羽曳野

世界遺産の古墳群

1400年に渡る歴史を伝える日本遺産「竹内街道」

全国約44,000の八幡宮で最古と言われる誉田八幡宮

河内源氏の里

国の重要文化財となっている古民家

羽曳野には歴史が日常の風景に溶け込んで

まちを歩けば、悠久の時の流れを感じることができます

そこには歴史の足跡が深く刻まれ

人々の想いが重なり合った時間が眠っています

過去と今がつながるまち

羽曳野にはそんな“ちょっといい”時が

今も流れています



文化財展示室
(市役所)



翠鳥園遺跡
(翠鳥園)



畑田家住宅
(郡戸)



月読橋
(駒ヶ谷)



西浦銅鐸
(陵南の森公民館)

※展示はレプリカ

「命のある限り守り続ける」 地域の歴史と絆をつなぐ神社の物語



誉田八幡宮は、社伝によればおよそ1,500年の長い歴史を誇ります。その歴史は、地域の人々の心に深く根付き、今なおその伝統は受け継がれています。「この神社が守ってきたものは、単なる建物や遺物ではありません。ここには、先人たちの思いや、地域の人々の心が込められています。」宮司の中盛秀さんはそう語ります。その言葉からは、歴史をただ受け入れるのではなく、深い敬意を払って守り続ける覚悟が伝わってきます。

神社が守る文化財と地域の誇り

神社に伝わる文化財は、まさにその歴史を物語っています。国宝の「金銅透彫鞍金具・こんどうすかしぼりくらかなく」（古墳時代）、「塵地螺鈿金銅装神輿・ちりじらでんこんどうそうしんよ」（鎌倉時代）や「誉田宗廟縁起・こんだそうびょうえんぎ」（室町時代）などの重要文化財。これらの貴重な品々は、単に過去の証しにとどまらず、地域の誇りであり、次世代へと受け継がれるべき宝物です。「私たちは、これらの文化財を大切に保管し、後世に伝えていく責任があります。来訪者に恥ずかしくないように守っていくことが、私たちの役目です。」中宮司は、その思いを次世代に伝えていくことがいかに大切かを話されました。

地域との絆と教育への思い

この神社はただの宗教的な拠り所ではなく、地域の人々が集う「憩いの場」としての役割も果たしています。中宮司は毎日「こんにちは」と声をかけ、訪れる人々とのつながりを大切にすること、それが、地域との絆を深める重要な一歩であると言います。また、子どもたちへの歴史教育にも力を入れており、毎年近隣の小学校から多くの生徒が訪れ、神社での学びを深めています。子どもたちが歴史を理解し、郷土愛を育むことが、地域の未来を守るにつながっています。

歴史的な遺産と祭り

神社の裏手からは、埴輪が発掘されており、これらの埴輪はその歴史を物語っています。羽曳野は、古代の交通網である竹内街道と東高野街道が交差する地点でもあり、歴史的にも重要な場所で、これらの街道はその歴史的な役割を物語っています。

誉田八幡宮の祭りにはお渡りの神事など長い歴史があります。また、だんじり祭りも境内の砂利の参道を駆け抜けて宮入りする様が迫力あり、地域にとって欠かせない行事で多くの人々に愛されています。

地域と歴史を守る強い決意

「私はこの神社で生まれ育ち、ここで奉仕をしてきました。私の命のある限り、この神社をしっかりと守り、受け継いでいくつもりです。それが、私の使命だと思っています。」中宮司の言葉には、この神社と共に生きる覚悟と、この土地に対する深い愛情と誇りが滲み出ています。その眼差しには地域と歴史を守るという強い決意が感じられました。



誉田八幡宮
中盛秀 宮司

金銅透彫鞍金具（国宝）

応神天皇陵陪塚丸山古墳から発掘されたもので、2具の鞍金具と、金銅轡鏡板、金銅花形辻金具、鹿角装刀残闕、鉄鏃、鎧等残闕などの一括品がある。



熱い心が織りなすまちの鼓動 地域をつなぐだんじり祭り



だんじり祭りは、まちが一年で最も熱くなる瞬間。祭りがまちを駆け抜けるとき、その背後には地域の誇りと強い絆が息づいています。この熱い想いを、祭りに関わる菅田馬場町の方々に聞きました。

菅田馬場町
高本保宏さん(左)
松本章さん(左中)
音川貴洋さん(右中)
田嶋朝幸さん(右)

ただの行事じゃない。生活の中に息づく誇り

「だんじり祭りには、小学生の頃から自然と関わってきました。物心ついたときには、もうその中にいたんです。」と皆さんは口々にこう語ります。祭りは日常の延長線上にあり、曳くことも、太鼓を叩くことも、世代を超えて受け継がれていく地域の営み。青年団や彼らを支えるOBたち、保存会など、役割を変えながらも人々のつながりは途切れることなく脈々と続いています。祭りへの熱い想いが、地域の絆を支え、祭りを成り立たせています。



四町セレモニーの風景

祭りを通じてつながる未来。

世代を超えて生き続ける誇り

「だんじり祭りを通じて、地域の絆が深まるんです。地域内の人々が、年代を超えてつながる場として、祭りは欠かせない存在です。」と、松本さんは語ります。

だんじり祭りは、地域をひとつにする。親・子・孫、三世代で祭りに関わる家庭も少なくありません。だんじりを曳く姿の裏には、そんな縦のつながりも静かに息づいています。

そして祭りの技術や伝統は、次世代にしっかりと受け継がれています。「子どもたちがだんじりに乗って太鼓を叩く姿を見ると、未来が明るいと感じます。彼らが将来、祭りを支えてくれることを信じています。」音川さんは語ってくれました。



2025 大阪・関西万博での出展風景

歴史と文化が日常に根付いた場所。

祭りは、誇りであり、未来への架け橋

羽曳野市は歴史と文化が日常に根付いた場所。だんじり祭りは時代とともに地域文化としての厚みを増し、今ではこのまちを象徴する存在になっています。また、祭りは、地域の“記憶”そのもの。その背景にある人々の想いを知ったとき、この祭りの持つ深い意味が胸に刻まれます。“ちょっといいがそこにある”祭りの興奮が去った後も、この想いは変わらず、人々の心の中に息づいていました。



菅田八幡宮 宮入の風景

「地元の歴史と共に、新しい挑戦を」 竹内街道と共に歩むイタリアンレストラン



日本遺産竹内街道に面した白鳥陵のそば近くに、古民家を活用したイタリアンレストランが開店しました。そのオーナーシェフ、塩野裕祐さんは、長年の修行と経験を経て、ついにこの地に店を構えることを決意。そこには家族との思い出深い土地への想いがありました。



viteraska
Instagram

思い出の詰まった場所で新たなスタートを！

塩野さんは三重県の鳥羽市で生まれ育ち、高校卒業後、調理師専門学校で技術を学び、大阪や東京で腕を磨いた後、イタリアへ渡り、北イタリア、南イタリア、そしてミラノで2年半にわたる修行を積んだ後帰国、大阪での店舗経営を経て、ついにこの地で店を開くことを決意しました。

羽曳野市への移転のきっかけは、家族との思い出が深い土地への想いから。「実は、今の店は曾祖父が住んでいたところなんです。隣家が祖父の家で幼い頃にはよく遊びに来ていました。その後、曾祖父の家は空き家になっていたんですが、家族から『ここを活かして何かお店をやってもらえたら』と言われ、思い出の詰まった場所で新たなスタートを切ってみようと思ったわけです。」塩野さんは語ります。「最初は不安もありました。大阪での店を離れるのは勇気が必要でしたが、歴史ある家をただ潰すのはもったいない、何か新しい形でここを活かしたいと思ったんです。」その想いが、新たな挑戦を始める原動力となったといいます。

ここにしかない歴史の魅力

「このまちには多くの歴史的な魅力が眠っている。最初は古墳があるから来たというわけではありませんでしたが、住んでみてこの場所が非常に歴史的な価値のある場所だと感じました。古墳やヤマトタケルの伝説など古代から続く地域の歴史や景色が変わらず受け継がれていく中でお店ができることは大きな魅力です。」竹内街道、白鳥陵という悠久の歴史がお店を包み込んでくれていると感じると塩野さんは言います。

地域とのつながりで羽曳野の魅力

「羽曳野は、自然が豊かで、イチジクやブドウ、ワインなどが美味しい。環境的にイタリアの中部地方に似ている部分が多いんです。生産者さんとのつながりを大事に、土地に息づく豊かな自然を活かして素材本来の美味しさを引き出すことで、生産者さんの思いを表現しています。羽曳野の魅力をお客様に伝えることが、僕の使命だと思っています。」レストランは単に食事を提供する場ではなく、地元の食材を活かし、この土地に根ざした料理を提供することで、まちを盛り上げていきたいと塩野さんは語ってくれました。

歴史や地域に根ざしたレストランとして、この地に新しい価値を創造していくことをビジョンとするレストラン。羽曳野の古くて新しい“ちょっといい”魅力が垣間見えてきました。



歴史資産を「自分の誇り」に 世界遺産のまち、羽曳野を支える市民ガイドの情熱

羽曳野まち歩きガイドの会
寺田貴美子さん

羽曳野まち歩きガイドの会
細見克さん

羽曳野市は、世界文化遺産など多くの歴史資産を有するまち。この歴史を地域の魅力として発信し、市民が自らの誇りとして感じられるようにと、10年前に立ち上げられたのが「羽曳野まち歩きガイドの会」です。細見克さんと、寺田貴美子さんにお話を伺いながら、野中寺、吉村家住宅、大津神社を巡ります。

「教科書通り」ではない、自分自身の思いを伝える

「羽曳野まち歩きガイドの会」は現在、会員数は約20名。活動は毎月1回、定例会を開いていて、まち歩きやバスツアーを通じて地域の歴史を伝えています。

代表の細見さんは、「市民が『歴史資産は自分の誇りだ』と思えるような豊かな気持ちを育て、地域の力を高めることが私たちの目標です。」と言葉に力を込めます。

この会の活動の特徴は、ただの観光案内にとどまらないところです。大切にしているのは、「歴史資産に対する自分自身の思いをしっかりと伝えること」。単に歴史的な事実を並べるだけではなく、ツアー参加者が心から納得し、興味を持ってもらえるように心掛けているといいます。

寺田さんは地元で長年住んでいたけれども「羽曳野まち歩きガイドの会」に参加して初めて、「歴史は教科書にあるものだと思っていたけれど、実際には自分のすぐ近くに存在しているのだと実感しました」と語ってくれました。



歴史を追求するだけでなく、市民力を高めるために

細見さんは、最後に「歴史資産を見て、心が豊かになることが一番大切。日々の生活に追われていると、つい忘れがちですが、今、自分たちが暮らしているこの土地には長い歴史が続いていて、その一部として私たちがいることを感じてほしい。」羽曳野に住んでいれば、遠くの観光地へ出かけなくても、すぐに歴史の大きさに触れることができる。「歴史資産は自分の誇りだと思ってもらえること、そして市民が盛り上がる力（市民力）を上げることを目指してこの活動を続けていきたい。」と話してくれました。



野中寺

聖徳太子が建立した46寺院の1つで、蘇我馬子の命により建てられたと伝えられています。太子の他の寺院が「上の太子」「下の太子」と呼ばれる中、「中の太子」として親しまれています。丹比道沿いに南大門を構え、七堂伽藍を有する大寺院でしたが、南北朝時代の戦火で焼失しました。江戸時代に本堂や薬師堂などが再建されました。境内には飛鳥時代の遺構が残り、国の史跡に指定されています。



吉村家住宅

元和の役後に建築された桃山期の書院造を一部に残す大庄屋の民家で、昭和12年に国宝に、その後、昭和25年に国の重要文化財に指定されました。吉村家の祖先は鎌倉時代初期に当地に土着した佐々木高綱の子孫とされ、代々丹比野の有力名主でした。南北朝から戦国時代にかけては丹下一族として土豪の名を馳せ、天正年間に姓を「吉村」に改めました。江戸時代初期には庄屋兼代官を務め、正徳年間以降は丹北・八上の38ヶ村の大庄屋を務める名家として、邸宅には独特の風格が漂っています。



大津神社

別名「丹下の大社」として親しまれています。平安時代前期の「延喜式」に記載され、朝廷から進物を受けていた由緒ある神社です。古代には「古市大溝」近くに流れる人工水路に関連し、津氏の祖先神を祀った社であったと考えられています。江戸時代には丹下9ヶ村の氏神として崇敬されました。現在の祭神は素戔鳴命、奇稻田姫命、天日鷲命、大山咋命、菅原道真などで、社殿は寛永17年に建てられた本殿と、拝殿、幣殿から成り、夏越祭や秋祭りが行われます。



私たちの身近な場所にも、深い歴史が息づいていることを感じたことはありませんか？このまちには、時の流れの中で紡がれた歴史があります。それは古代から現代まで続く命のつながりであり、私たちが今ここに立つ意味を感じさせてくれます。河内源氏発祥の地として知られる壺井八幡宮と通法寺跡を訪ねて、河内源氏の里の歴史とその魅力に迫ります。

河内源氏と壺井八幡宮の歴史的つながり

河内源氏という名前は、平安時代、源頼信が河内守に任命されこの地を拠点に選んだことに由来します。「ここは交通の要衝となる竹内街道が近くを通り、水運にも恵まれていました。また、周囲には豊かな土地が広がり、守りにも適していたことが、この地を選んだ理由だろうと思います。」と語ってくれたのは、壺井八幡宮宮司の高木大明さん。

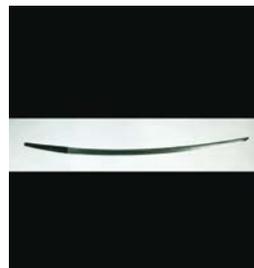
壺井八幡宮は、源頼義が「前九年合戦」に勝利したことへの感謝の意を込めて石清水八幡宮の神霊を勧請し創建されたといわれます。「黒韋威胴丸(くろかわおどしどうまる・重要文化財)」や「天光丸の太刀(てんこうまる・重要美術品)」など源氏の栄光を物語る貴重な品々も所蔵されており、境内には樹齢1,000年と言われる楠の巨木がそびえ立ち大阪府の天然記念物にも指定され、自然と歴史が織りなす風情が醸し出されています。

「この神社は南北朝時代から戦国時代にかけてたびたび兵火に見舞われ荒廃しましたが、その都度、時の幕府によって再建されてきました。現在のご社殿は、江戸時代に徳川綱吉の命により再建された当時のものを平成に復元修理したものです」と高木宮司は語ります。



黒韋威胴丸(重要文化財)
胴丸は中世の甲冑の一種。全体的な様式から、南北朝時代ごろの作品と考えられます。

天光丸の太刀(重要美術品)
江戸時代の『河内名所図会』の壺井八幡宮の項に「天光丸太刀」として紹介され、同じ鉄で制作した「鬼切丸(おにきりまる)」という名の太刀と雌雄を構成していたと記されています。



歴史の「風」を感じるまち

「私が今、この地で感じることは、歴史が私たちの生活の中に息づいているということです。羽曳野は、縄文時代から現代に至るまで、すべての時代の証拠が残されている場所です。古墳や古い寺社が、日常の風景に溶け込んでおり、まちを歩けば、歴史の『風』を感じることができます。若い世代へ伝えたいことは、歴史を知り、そのルーツを誇りに思うことの大切さです。自分たちのまちの歴史を『自分のこと』として学ぶことは地域への愛と誇りを深め、ひいては国際的な視野を広げることにもつながってゆきます。」

高木宮司の言葉には、この神社を守り続けて、河内源氏の物語とその誇りを地域の人々と共に未来へとつなげていくという強いメッセージが響いていました。



壺井八幡宮
高木大明宮司

大阪歴史博物館にて
特別企画展
「河内源氏と壺井八幡宮」開催
2026年1月16日～3月15日
休館日：火曜日



詳細はこちら

河内源氏の足跡を辿る ～河内源氏の里、受け継がれし誇りと歴史の息吹～

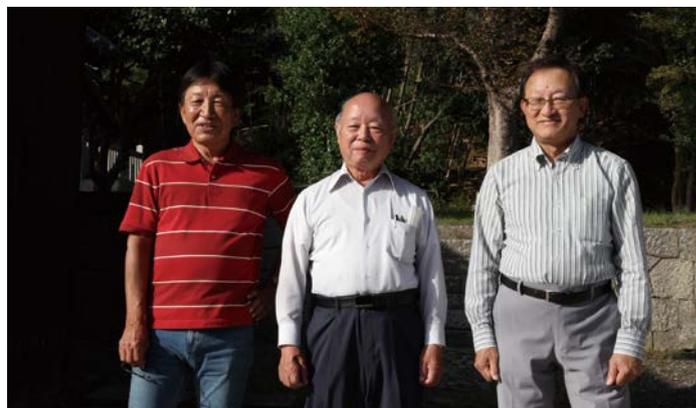


この地に住む誇り

次に訪れたのは通法寺跡、通法寺は長久4年（1043年）に源頼義によって創建されました。その後、河内源氏の菩提寺となり、源氏三代の墓が建てられています。頼義が獵の途中、山中で拾った仏像を本尊として安置したのがはじまりといわれ、その後南北朝時代に兵火にかかり焼失しましたが、元禄13年（1700年）に徳川幕府により再建されました。明治初期に廃寺となり現在は山門や鐘楼、礎石などが残っています。

地元の親睦団体「共栄会」の方々にお話を伺いました。「通法寺跡周辺では、歴史資産をみんなで綺麗に保つていこうという強い思いから、地域住民の皆さんで清掃活動や草刈りなどを長年行っています。また、ここには源氏三代の墓など河内源氏の里を訪ねて遠方からお越しになる方も多く、史跡をご案内しながら歴史のご説明をさせていただいた経験が何度もあります。」共栄会の石橋昌也さんは語ります。

この地域は、水運の利便性や要衝として古墳時代から栄えていた土地であり、河内源氏の拠点として数々の貴重な歴史資産が残っている。こうした場所に住むことには誇りがあるし、これからもこの歴史を守り続けていきたい。と皆さん話してくれました。



通法寺共栄会

石橋昌也さん、松井永徳さん、小川隆正さん

歴史が心に息づく、未来へ紡ぐ物語

前九年合戦や後三年合戦で活躍し日本の歴史に名を刻む八幡太郎義家、全国的に有名なこの名將がここ羽曳野で生まれたことを知る人は多くはないかもしれません。

鎌倉幕府を開いた源頼朝につながる河内源氏の源流がこの地から発祥したことは、郷土の大きな誇りです。

歴史はただ過去の出来事として存在するのではなく、私たち一人ひとりの心に息づき、現在を生きる力となります。歴史の中で生きた先人たちの足跡を辿ることは未来への大切な架け橋となるでしょう。その歴史に触れ、心を動かされることで、ここに住む誇りや地域のつながりがさらに強くなります。私たちの足元には、すでに長い時間を超えた“ちょっといい”が確かに存在しています。それは次の世代へと紡がれ、また次の新たな物語を生んでいくことでしょう。



源氏三代の墓

現在、通法寺境内の西端に頼義の墓があり、石垣に囲まれた基壇が残っています。江戸時代に書かれた『河内名所図会』には、かつて墓堂が建っていたことが描かれています。また、頼信や義家は通法寺南の山上に葬られたと伝えられ、円形の塚が残っています。